

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	清朝學者小識（一）：雜録
Author(s)	空齊，手録
Citation	龍南會雜誌， 6 6： 3 3 - 3 9
Issue date	1898-06-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5114
Right	

雜 錄

清朝學者小識 (二)

空齋手錄

顧炎武 初名は絳、別字は亭林、江南崑山の人、年十四、諸生と爲り、復社に入り、即ち經世の學を講求す、貢薦を以て兵部司務を授け、再び職方主事に薦む、皆就かず、康熙戊午、鴻詞科詔下る、諸鉅公爭ふて之を致さんと欲す、先生死を以て辞す、次年明史を修む、又た之を薦めんと欲す、書を葉方藹に貽り、身を以て國に殉するを誓ひ、始めて免るゝを得たり、西北を周歷し、二十年華陰に卒す、徐乾學は兄弟の甥なり、未だ遇はざるや、先生其乏を振す、後顯達して東南人士の宗と爲る、書を累て先生の南歸を迎ふ、至らず、此に至て卒す、年六十有九、先生少ふして宋史劉忠肅の傳を讀み、曰く、士は當に器識を以て先と爲すべし、一命文人と爲る、觀るに足る者無しと、即ち終身應酬文字を謝絶す、李一曲其母の傳を爲るを求む、再三に至る、終に之を謝す、嘗て曰く、文は經術政理の大に關せざれば爲るに足らざるなり、韓公八代の表を起す、若し但だ原道諫佛骨表平淮西碑張中丞傳後序等の諸篇を作て、而て一切諛墓の文作らざれば豈誠の山斗ならずやと、其學を論すれば、則ち禮を以て先と爲す、毎に諸生を誡めて曰く、君子學を爲す、禮を捨てゝ何にか由らんと、先生書に於て窺はざる所なし、出遊にも馬二騾二を隨へ書を載せ、到る所或は之を旅窓に繙き、或は之を馬背に誦す、尤も心を經世の學に留む、凡そ國家の典制、郡邑の掌故、天文儀象、河漕兵農の属、原委を究め、得失を考へざる莫し、晩に益々志を六經に篤くす、謂らく、經學即ち理學也、經學を捨てゝ理學を言

ふ者あり、乃ち禪學に墮て而て自ら知らざる也と、著す所ろ、天下郡國利病書、肇域志、易論、詩本音、易音、唐韻正、韻補正、古音表、金石文字記、求古錄、日知錄、左傳杜解補正、石經考、二十一史年表、歷代帝王京宅記、亭林文集、詩集、營平二州地名記、昌平山水記、山東考古錄、京東考古錄、譎觚、菰中隨筆、救文格論、亭林集等の書あり、并に學術世道に補ある者、

黃宗羲

字は大沖、黎州と號す、浙江餘姚の人、明の御史忠端公黃尊素の長子なり、忠端公は楊左楊左、

斗の同志、魏閼忠賢を劾するを以て詔獄に死す、莊烈帝位に即く、先生時に年十九、疏を草し、京に入り冤を訟ふ、鐵椎を袖にし、許顯純を椎し、崔應元の鬚を拔ぐ、歸て父の神主を祭り、劉戡山の門に遊ぶ、蓋し忠端の遺命を奉せる也、既にして清兵塞に入る、戡山節に死し、弟子多く之に殉す、先生里中の子弟數百人を糾合し、孫嘉績熊汝霖の諸軍に江上に隨ひ、世忠營と號し、布衣を以て軍事に參せんことを請ふ、許されず、職方を授け、尋て監察御史に改め、左副都御史に累擢せらる、從亡年あり、歸て乃ち母を奉て老し、力を著述に畢す、而て四方諸業の士漸く至る、自ら言ふ、學を戡山に受くる時、氣節を爲すを喜ぶ、患難の後始めて深造多しと、丁未復た證人書院を擧げ、戡山の緒を申す、先生謂らく、明人の講學、語錄の糟粕を襲ひ、六經を以て根柢と爲さず、學者を教ふるは、必ず先づ經を窮めて而て事實を諸史に求むべしと、又た謂らく、書を讀むこと多からざれば、以て斯理の變化を証すること無し、多くして而して之を心に求めざれば、則ち俗學と爲る、康熙戊午詔て博學鴻儒科に擧ぐ、就かず、又た薦めて明史を修めしむ、力辞す、朝廷其竟に致すべからざるを知り、特に浙中の督撫に命じ、先生の著述中、史事に關する者を抄し、京師に送らしむ、聖朝儒術を表章し、大臣に鉅人長德多し、顧ふに皆先生を致す能はざるを以て恨と爲せり、湯潛菴斌曰く、黃先生の

學を論ずる、大禹の水を導き山を導くが如し、脈絡分明、眞に吾黨の斗なりと、康熙乙亥秋卒す、年八十有六、先生の學六經に基き、百氏を旁羅し、俱に其本末を得、尤も天文の學に精く、少ふして神悟ある者に似たり、著作頗る多し、其重なる者は、易學象數論、授書隨筆、春秋日食歷、孟子師說、深衣考、今水經、歷代甲子考、明史案、歷書、明夷待訪錄、海外痛哭記、日本乞師記、留書、思舊書、汰存錄、二程學案、宋儒學案、元儒學案、明儒學案、大統法辨、時憲書法解、新樵交食法圖解、割圓八綫解、授時法假如、西洋法假如、回々法假如、明文海、南雷文案、文定、文約等あり、

黃宗炎

字は晦木、忠端公の次子、黎州の弟なり、季弟宗會と并て浙中の三黃と稱す、學行は伯兄に亞ぎ、狷介は幾んど之に過ぐ、明の崇禎間の貢生、鼎革の變に兄に世忠營に隨ひ、乱後書を賣て自ら給す、人鷗鵠先生と稱す、講易獨り深奥を開く、力めて大極圖の非を辨す、朱竹垞毛西河の考ふる所と略ぼ同と云、著す所ろ、周易象辭、周易尋門餘論、圖書辨惑、二晦山棲等の集あり、宗會は中年禪に遁る、

孫奇逢

字は啓泰、一字鐘元、直隸容城の人、少ふして倜儻奇節を好む、而て內行篤修、經世の略を負ふ、尤も鹿忠節善繼と友とし善し、交を楊忠愍繼盛の祠下に定め、皆慨然身を殺すの志あり、年十七万曆庚子鄉試に擧げられ、京師に居る、左忠毅光斗魏忠節大中周忠介順昌と相尙るに氣節を以てす、家故と貧、日食常に繼がず、嘗て鹿忠節と學を論ず、辰より日昃に至り、始めて豆麪を御て羹を作る、怡然として足らざる色なし、自ら言ふ、憂患困鬱の中より、心性の本原を默識す、生平力を得る、實に此に在りと、天啓五年、逆阉魏忠賢政を乱り、大に鉤黨の獄を興す、是より先、高攀龍顧憲成等學を東林に講ず、海内學者、名を立て義を慕ふ者多く附す、魏逆政を得るに及び、穢者争て其門に出

で、東林君子を以て黨と爲す是に由て左魏周の諸賢先後皆逮へらる、先生身を傾けて之を救はんとす、成らず、乃ち皆其喪を經紀す、衆皆先生の爲めに危む、而して卒に免れし者、蓋し忠賢の左右、皆近畿の人、夙に先生の重すべきを知れば也、是に於て乎先生義聲一世に震ふ、然れ共前後十一徵、皆起たず、晩に河を渡り、室を蘇門の夏峯に築き、兼中と曰ひ、易を其中に讀み、子弟を卒て躬ら耕す、居る所聚を成す、公卿の使節を持て此地を過る者、騶從を屏け、先生を一見するを以て快と爲す、湯斌の如き、官遊業を受る凡そ十年、始め先生鹿忠節と學を講ず、象山陽明を以て宗と爲す、晩に更に朱子の説に和通す、其身を持する、務めて自ら刻砥す、而て人に接する、町嘆なく壹に誠意を以てす、此を以て名天下に在て、而て人忌嫉する者なし、夏峯に居ること二十五年、康熙十四年卒す、年九十有二、學者夏峯先生と稱す、先生嘗て學者に語て曰く、吾始め自ら楊左諸公と同命を分どす、亂離に涉るに及び、死を犯すものゝ數、而て終に恙なし、是を以て學は命を知て惑はざるを貴ぶと、其學慎獨を以て宗と爲す、著す所る、四書近指、讀易大旨、書經近旨、聖學錄、兩大案錄、甲申大難錄、家禮酌、歲寒居答問、孝友堂家乘、中州人物考、取節錄、孫文正公年譜、乙丙記事あり、又た理學宗傳を著し、周邵張程朱陸薛王及羅念菴顧涇陽を表て十一子と爲す、別に諸儒考を爲て之を附す、蓋し獨見に出づ、舊聞に依傍する者の比にあらずと云、

李容

字は中孚、自ら署て二曲土室病夫と曰ふ、陝西盤屋の人、先世達者なし、幼にして孤なり、年十六、粗ば文義を解す、其母日に忠孝節義の事を言て以て之を督す、母子相依る、或は數日火を學けず、泊如たり、平生關學を昌明するを以て己が任と爲す、家に書なし、人に從て借覽す、經史百家より二氏の書に至るまで、觀ざるなし、其學を論する、曰く、天下の大根本は人心のみ、大肯綮は天下

の人心を提醒するのみ、是故に天下の治亂は人心を視、人心の邪正は學術を視る、凡そ學は反身に在り、道は守約に在り、功は過を悔て自ら新にするに在り、而て必ず自ら靜坐して心を觀ず、始め靜坐すれば乃能く過を知る、知れば則ち能く悔め、悔めれば乃ち能く自ら新にす、又た言ふ學者當さに先づ象山慈湖陽明白沙の書を觀、心性を闡明し、本初を直指し、以て斯道の大源を洞し、然後程朱子及康齋敬軒涇野整菴の書を取て玩索し、以て踐履の功を盡くすべし、否則ち醇謹なる者は通慧に乏く、穎悟なる者は異端を難ゆ、朱と言ひ陸と言ふに論なく、皆道に於て未だ得る有らざる也と、是に於て、關中の士爭て先生に向て學を問ふ、薦めんとする者あれば、病と稱し固辭して可かず、天子西巡し旨を傳ふるに及、始て其子慎言を遣し、行在に謁り、著す所の四書反身錄、二曲集を進めしむ先生博通、嘗て十三經糾繆、廿一史糾繆、及び象數諸書を著す、然れ共自ら以て口耳の學に近しと爲し、敢て人に示さず、惟反身錄を以て學者に示す、晚年富平に遷る、學者日に至る、是時に當り、北は則ち孫夏峯あり南は則ち黃黎州あり、西は則ち先生あり、時に以て三大儒と爲す、魏象樞曰く、生平見るを願て得ざる者三人、夏峰黎州二曲なりと、然れ共夏峯黎州皆素望あり、先生孤童より起て、關學六百年の統を接す、寒饑清苦の中、耿光四出す、馮籍する所なし、扳天倚地、二先生に視ば、尤も難と爲すと云、著は四書反身錄、反身續錄、二曲集の外に歷年紀略、潛確錄あり、

張爾岐

字は稷若、蒿庵と號す、山東濟陽の人、明季の諸生たり、兵後棄去り、隱居して志を求む、載籍を博綜し、篤志力行を以て本と爲す、是時に當り、孫蘇門黃黎州李二曲、學を講する、皆陽明白沙の間に出入す、先生獨り程朱を確守し、少も變せず、隱然以て陸清献張清恪の先を開くあり、平生與に遊ぶ所ろ、亭林の外は惟だ長山劉友生、樂安李象先、關中李二曲、王山史四人のみ、常に戸を開

お書を著す、經に於て尤も三禮に精し、顧亭林の折服する所たり、亭林嘗て曰く、獨り三禮に精く卓然たる經師、吾張稷若に如かずと、又た曰く、稷若著す所の儀禮鄭注句讀、先儒に根本し、立言簡當なり、聞達を求めざるを以て當世に名なしと雖、其書實に傳ふべしと、康熙十六年卒す、年六十有六、儀禮鄭注句讀、儀禮考注訂誤、易說略、詩說略、春秋傳議、夏小正注、弟子職注、老子說略、蒿菴文集、蒿菴閒話等の書を著す

魏象樞

字は環極、環溪と號す、又た庸齋と號す、山西蔚州の人、順治三年進士、官刑部尚書に至る、果敢と謚す、性骨鯁にして敢て事を言ひ、尤も當世の人才の賢不肖、治術の得失、民生の休戚に注意し、是を是とし、非を非とし、必ず意を盡くして乃ち止む、吏科給事中と爲る、時事を疏論し、直聲朝野に震ふ、左都御史と爲る、明珠を劾す、誠に一代の名臣、又た清朝直臣の冠たり、嘗て曰く、大臣の誼は人を以て君に事るに在り、故に君子小人進退消長の際に於ける、之を爭ふと尤む力む、其講學篤實純正、孫夏峯孫退谷及び湯陸諸公と書を遣り往復せり、文章樸直、其人と爲の如し、又た人を知るの鑒あり、湯孔伯斌于北溟成龍陸稼書隰其郝冰滌浴皆其先後に疏薦する所、康熙二十三年、骸骨を乞ひ、二十五年家に薨す、年七十有一、著に儒宗錄、知言錄、寒松堂集あり、張之洞の國朝著述諸家姓名略に陸王兼程朱の理學家に繫く、蓋し道を求むる、門戸に拘々たらざる者、左に致知格物解を附録す、

致知格物解

致知格物諸儒辨論紛々家持一說余聞見有限曷敢以管見妄爲低昂嘗因書旨不明取白文讀之從上節物有本末事有終始讀到此處不曰欲致其知者先格其物而曰致知在格物何也蓋明指天下國家身心意

心齊馮少礪兩先生
解說爲是其他皆似
是而非者也云々心
齊即陽明之門人亦
有疑於不曰欲致
其知先格其物而
教知在格物者其論
見于王文貞公全集
卷三

是物致知工夫就在這裏不在別處也與文不在茲乎直在其中矣等在字相同與在明明德等在字相應大
人之學內聖外王萬物皆備開手便從天下做工夫起一串聯珠歸落致知格物是大學最得力處朱子解即
物窮理原自實學後之說者謂其即天地古今之物而窮其理將不勝窮矣故稍有滯碍夫天地古今之物實
有不能窮亦有不窮者以其無關於天下國家身心意也惟即天下國家身心意之物而窮其理纔是致知
纔是明明德如天下本平國本治家本齊身本修心本正意本誠而何以不平不治不齊不修不正不誠也天
下不平國不治家不齊身不修心不正意不誠而何以平之治之齊之修之正之誠之也此物未格此知不至
不能洞々徹々必且以非爲是以是爲非顛倒混淆毫釐千里非大人之學也大人視天下國家等皆我性靈
中物諸凡善惡真妄公私義利之關纖微毫髮都有一箇理在由本及末原始要終一一討得分曉我於物無
疑物於我無蔽物之所感知是知非知之所存有是無非此誠意之所以先致知也然則致知不先格物而在
格物者斷々格天下國家身心意之物而天地古今之物亦格其關於天下國家身心意者而已矣非泛然逐
物而格之明甚況致知是知止真工夫固未有紛紜繁曠之交役耳目竭精神而始云知止者果爾則定靜安
慮中便着不得天下國家等物只閉戶澄心以盡其理是又離物而求知與禪學無異近有解物爲物欲格爲
格去者頗合明明德之旨而物有本末一句又不貫通物欲安得有本末耶且窮理之時是非分明積久功深
物欲何處潛伏格去之意已在窮理之中矣余反覆紬繹朱子之說終不可易也或曰八條各自爲目難以牽
合又曰致知者致吾之良知於事事物物又曰知之所在即是物物卽性也善也率皆明儒之說余所不解者
第就白文讀之物有本末天下國家身心意知皆物也事有終始格致誠正修齊治平皆事也本末始終當身
體認隨事措施此知行合一之學學之所以大也（寒松堂全集卷十二）